

# 女子大学生のカウンセリングへの被援助志向性と共感性、 ソーシャルサポートとの関連について

The relationship between help seeking preference,  
empathy and social support among female university students

萩原 沙知

跡見学園女子大学大学院  
人文科学研究科臨床心理学専攻

Sachi Hagiwara

Division of Clinical Psychology,  
Graduate School of Humanities,  
Atomi University

宮岡 佳子

跡見学園女子大学  
心理学部臨床心理学科

Yoshiko Miyaoka

Department of Clinical Psychology,  
Faculty of Psychology,  
Atomi University

## 要 約

本研究の目的はカウンセリングへの被援助志向性と共感性、ソーシャルサポートの関連について明らかとすることである。A女子大学の学生に質問紙を配布し、そのうちの408名を対象に分析を行った。質問紙には①フェイスシート②大学生用ソーシャルサポート尺度③被援助志向性尺度④援助要請スタイル尺度⑤多次元共感性尺度を用いた。重回帰分析からカウンセラーへの被援助志向性は家族への被援助志向性の下位尺度の「家族への被援助に対する懸念や抵抗感の低さ」と友人への被援助志向性の下位尺度の「友人への被援助態度に対する肯定的態度」に正の影響を受けていた。共分散構造分析から家族への被援助志向性と家族のソーシャルサポートが友人やカウンセラーへの被援助志向性に正の影響がある。このモデルでは共感性の下位尺度の「他者指向的反応」と「視点取得」が家族・友人・カウンセラーへの被援助志向性に影響を与えていた。本研究から共感性の「他者指向的反応」と「視点取得」が被援助志向性を高める。家族への被援助志向性と家族のソーシャルサポートがカウンセラーを含めた援助者に援助を求めることの基盤となる可能性があることが示された。

【Key Word】 カウンセリング 被援助志向性 共感性 ソーシャルサポート 女子大学生

## I 問題と目的

生涯を通して4人に一人が何らかの精神障害を経験するが、経験していた者のうちこころの健康に関する受診や相談歴があったのは約30%と少ない(川上, 2007)。また青年期は自我同一性を獲得することが課

題となり、共感性の発達においても情動の原因や結果、情動の関係などについて理解できるようにつれて次第に複雑化する(Hoffman, 2001)。このような重要な時期にある学生の問題を放置することは学業達成やウェルビーイングに悪影響があり、長

期の不調につながるため早期に適切なケアを求めることが重要となる。カウンセリングは心身の問題を扱う専門的な援助の営みであり、受けやすくすることで心身の健康や予防につながる。そのため本研究ではカウンセラーへの被援助志向性に着目した。

カウンセリングとは、「言語的および非言語的コミュニケーションを通じて行動の変容を試みる人間関係」(國分, 2000)である。また、カウンセリングは社会的にも認められつつあり、2001年に「スクールカウンセラー活用事業補助」へと制度化、2013年には20310箇所の学校にスクールカウンセラーが派遣されている(文部科学省, 2018)。

被援助志向性(help-seeking preference)とは、「個人が、情緒的、行動的問題および現実生活における中心的な問題で、援助者を求めるかどうかの認知的な枠組み」(水野・石隈, 1999)である。また、水野・石隈(1999)は、カウンセラーへの被援助志向性に関連する要因についての研究を以下の4領域にまとめている。(1)性差、年齢などのデモグラフィック要因との関連；女性の方が被援助志向性が高い、若者と高齢者は中高年に比べてメンタルヘルスサービスを受けない。(2)ソーシャルサポート、事前の援助体験などのネットワーク変数との関連；専門家に援助を求める人はソーシャルサポートが少ない、過去に専門家に援助を求めたことがあるや、知り合いがメンタルヘルスに従事するなどメンタルヘルスサービスの事前接触があるほど援助を求める。(3)自尊心、自己開示などパーソナリティ変数との関連；自尊心が低い人ほど援助を求めやすい、自己開示

する人ほど被援助志向性が高い。(4)個人が抱えている問題の深刻さ、症状との関連；抱えている問題が大きいほど援助を求める可能性がある。

ソーシャルサポートは、周囲のあたたかな反応や周囲が専門家を探す手伝いをするため(Starzynski et al., 2007)、家族や友人サポートがカウンセラーへの被援助志向性の促進につながる(水野, 2017)などソーシャルサポートが被援助志向性を高めるといった研究もある。その一方で、永井(2010)は悩みの程度や自尊感情がカウンセラーへの被援助志向性に正の影響があるが、友人サポートがカウンセラーへの被援助志向性に負の影響があると報告している。以上のようにソーシャルサポートがカウンセラーへの被援助志向性にどのように影響するかについて意見が分かれている。

島田・高木(1994)は共感性の高い人は相手と同じ立場に立つと言った側面から援助者に対する遠慮が働くため、援助を求めずかえって問題を大きくすると考えた。すなわち、共感性は被援助志向性を抑制すると推測した。共感性が高く、他者に対して敏感すぎるために必要以上に苦しむことになり苦痛のことを意図的に人に伝えずにいることがある(Larochette et al, 2006)。しかしながら、共感性は援助行動を動機づける(Schaller & Cialdini, 1988)と、援助行動を促すものとして研究されてきた。これらから共感性は被援助志向性だけでなく、援助行動にも関連し、被援助者や援助者の両者にとって重要なものであると考えられる。

本研究の意義は、女子大学生がカウンセリングを受けやすくする要因を明らかとす

ることで、カウンセリングの利用率増加につなげる。また家族や友人ごとにソーシャルサポートを分け被援助志向性の関連について研究したものは少なく、被援助志向性と共感性に着目した量的な研究は新しい。本研究により、女子大学生のメンタルヘルス向上とともに心身の問題の予防につながる。

本研究では一般女子大学生を対象にカウンセリングへの被援助志向性と共感性、ソーシャルサポートに関する質問紙調査を行い、それぞれの関連について統計学的に検討することを目的とする。

## II 仮説

本研究では以下の仮説を立てる。

仮説1 共感性が高いほど、一般的な被援助志向性とカウンセラーへの被援助志向性が高くなる。

仮説2 ソーシャルサポートが高いほど、一般的な被援助志向性とカウンセラーへの被援助志向性が高くなる。

## III 方法

### 1. 対象者

関東圏内のA女子大学の学生451名に質問紙を配布した。

### 2. 質問紙内容

(a) フェイスシート、年齢やカウンセリングを受けたことがあるかなど5項目。

(b) 大学生用ソーシャルサポート尺度(嶋, 1992) ; 大学生用のソーシャルサポートを測る12項目, 家族サポート・友人サポートの2カテゴリーの合計24項目。

(c) 被援助志向性尺度(本田ら, 2011) ;

被援助志向性を測る13項目, 「被援助態度に対する肯定的態度」と「被援助に対する懸念や抵抗感」の二つの下位尺度があり, 家族・友人・カウンセラーの3カテゴリーの合計39項目。

(d) 援助要請スタイル尺度(永井, 2013) ; 援助要請スタイルを測る12項目, 「援助要請過剰型」「援助要請回避型」「援助要請自立型」の3つの下位尺度からなる。

(e) 多次元共感性尺度(鈴木・木野, 2008) ; 他者の心理状態に対する反応(共感性)を測る24項目, 「被影響性」「他者指向的反応」「想像性」「視点取得」「自己指向反応」の5つの下位尺度からなる。

## 3. 倫理的配慮

本研究は跡見学園女子大学文学部臨床心理学科の倫理委員会にて承認された(受付番号: 18004)。

## IV 結果

### 1. 対象者の背景

回答に不備のなかった408名( $M = 18.74$ ,  $SD = 1.18$ )を分析対象とした。対象者の各尺度についてTable 1に示した。

### 2. カウンセリング経験の有無による $\chi^2$ 検定分析結果

カウンセリング経験の有無で, ウンセリング経験有り群(86名)とカウンセリング経験なし群(314名), よくわからないと答えた者(8名)に分けた。

カウンセリング経験と家族や友人のカウンセリング経験の関連について検討した。その結果, カウンセリング経験と家族の

Table 1 対象者の各尺度の平均値、標準偏差、最小値、最大値

	最小値-最大値	女性(n=408)	
		M	SD
ソーシャルサポート			
ソーシャルサポート(総合点)	(24-120)	92.21	14.89
家族サポート	(12-60)	44.36	9.65
友人サポート	(12-60)	47.85	8.14
被援助志向性			
一般的な被援助志向性(総合点)	(36-156)	121.54	15.92
家族への被援助志向性(合計点)	(13-52)	41.29	7.30
家族への被援助態度に対する肯定的態度	(6-24)	18.47	4.16
家族への被援助に対する懸念や抵抗感の低さ	(7-28)	22.82	4.75
友人への被援助志向性(合計点)	(13-52)	40.58	6.75
友人への被援助態度に対する肯定的態度	(6-24)	18.20	4.07
友人への被援助に対する懸念や抵抗感の低さ	(7-28)	22.38	4.74
カウンセラーへの被援助志向性(合計点)	(13-52)	39.67	5.59
カウンセラーへの被援助態度に対する肯定的態度	(6-24)	15.49	4.22
カウンセラーへの被援助に対する懸念や抵抗感の低さ	(7-28)	24.17	4.12
援助要請スタイル			
援助要請過剰型	(4-28)	16.87	6.80
援助要請回避型	(4-28)	12.15	5.74
援助要請自立型	(4-28)	18.39	4.90
共感性			
共感性(総合点)	(24-120)	85.28	9.34
被影響性	(5-25)	16.54	3.80
他者指向的反応	(5-25)	18.88	3.14
想像性	(5-25)	17.98	3.69
視点取得	(5-25)	18.41	3.00
自己指向的反応	(4-20)	13.47	2.77

ウンセリング経験は $\chi^2(4) = 63.19$ ,  $p < .001$ であった。残差分析を行った。その結果5%水準でカウンセリング経験が有る

と家族のカウンセリングの経験が有ることが多く、カウンセリング経験がないと家族のカウンセリング経験もないことが多い

Table 2 カウンセリング経験と家族のカウンセリング経験のクロス表

		家族のカウンセリング経験		
		はい	いいえ	よくわからない
カウンセリング経験	はい	度数 20	39	27
		調整済み残差 2.9*	-7*	6.4*
いいえ	度数	35	261	18
	調整済み残差	-2.8*	7.3*	-6.9*
よくわからない	度数	1	4	3
	調整済み残差	-0.1	-1.6	2.3*

\* $p < .05$

(Table 2)。

また、カウンセリング経験と友人のカウンセリング経験は $\chi^2(4) = 30.74$ ,  $p < .001$ であった。残差分析を行った。その結果5%水準でカウンセリング経験が有ると友人の

カウンセリング経験が有ることが多く、カウンセリング経験がなければ友人のカウンセリング経験もないことが多い (Table 3)。

Table 3 カウンセリング経験と友人のカウンセリング経験のクロス表

		友人のカウンセリング経験		
		はい	いいえ	よくわからない
カウンセリング経験 はい	度数	33	22	31
	調整済み残差	3.1*	-5.1*	2.9*
いいえ	度数	67	181	66
	調整済み残差	-3.5*	5.5*	-2.8*
よくわからない	度数	4	2	2
	調整済み残差	1.6	-1.4	0

\* $p < .05$

### 3. カウンセリング経験の有無による重回帰分析結果

カウンセリング経験の有無ごとに重回帰分析を行った。その結果をTable 4, Table 5, Table 6, Table 7に示した。

#### (1) カウンセリング経験なし群の分析

カウンセリング経験なし群において一般的な被援助志向性やカウンセラーへの被援助志向性、家族への被援助志向性、友人への被援助志向性に及ぼす影響を検討した。

その結果、一般的な被援助志向性の回帰式は有意 ( $p < .001$ ) であり、 $R^2 = .46$ で

Table 4 カウンセリング経験の有無による一般的な被援助志向性の重回帰分析結果

カウンセリング経験の有無	一般的な被援助志向性	
	経験なし群 ( $n = 314$ )	経験有り群 ( $n = 86$ )
家族サポート	.31***	.41***
友人サポート	.17***	.16
援助要請過剰型	.11*	-.07
援助要請回避型	-.25***	-.36***
援助要請自立型	.01	.09
被影響性	.04	.03
他者指向的反応	.13*	.24*
想像性	-.10*	.00
視点取得	.06	-.07
自己指向的反応	-.08	-.07
$R^2$	.46***	.48***

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

Table 5 カウンセリング経験の有無によるカウンセラーへの被援助志向性の重回帰分析結果

カウンセリング経験の有無	カウンセラーへの被援助志向性	
	経験なし群 ( <i>n</i> = 314)	経験有り群 ( <i>n</i> = 86)
家族サポート	-.02	-.03
友人サポート	.04	-.10
援助要請過剰型	-.05	-.11
援助要請回避型	.01	-.36**
援助要請自立型	-.01	.12
被影響性	-.07	.10
他者指向的反応	.16*	.27*
想像性	-.01	-.01
視点取得	.02	.03
自己指向的反応	.03	.02
家族への被援助態度に対する肯定的態度	.12	-.01
家族への被援助に対する懸念や抵抗感の低さ	.22**	.16
友人への被援助態度に対する肯定的態度	.23***	.10
友人への被援助に対する懸念や抵抗感の低さ	.14	.22
<i>R</i> <sup>2</sup>	.28***	.30***

\**p* < .05, \*\**p* < .01, \*\*\**p* < .001

Table 6 カウンセリング経験の有無による家族への被援助志向性の重回帰分析結果

カウンセリング経験の有無	家族への被援助志向性	
	経験なし群 ( <i>n</i> = 314)	経験有り群 ( <i>n</i> = 86)
家族サポート	.48***	.61***
友人サポート	-.18***	.04
援助要請過剰型	.01	-.02
援助要請回避型	-.14**	-.14
援助要請自立型	-.00	.02
被影響性	.05	-.07
他者指向的反応	.01	-.06
想像性	.07	-.02
視点取得	.01	-.06
自己指向的反応	.01	.09
友人への被援助態度に対する肯定的態度	.10*	.09
友人への被援助に対する懸念や抵抗感の低さ	.33***	.14
カウンセラーへの被援助態度に対する肯定的態度	.12**	.00
カウンセラーへの被援助に対する懸念や抵抗感の低さ	.13**	.16
<i>R</i> <sup>2</sup>	.59***	.55***

\**p* < .05, \*\**p* < .01, \*\*\**p* < .001

Table 7 カウンセリング経験の有無による友人への被援助志向性の重回帰分析結果

カウンセリング経験の有無	友人への被援助志向性	
	経験なし群 ( <i>n</i> = 314)	経験有り群 ( <i>n</i> = 86)
家族サポート	-.15**	-.03
友人サポート	.33***	.27**
援助要請過剰型	.16***	.12
援助要請回避型	-.08	-.08
援助要請自立型	.01	.03
被影響性	.05	.07
他者指向的反応	.02	.24
想像性	-.12**	-.01
視点取得	.05	-.08
自己指向的反応	-.10*	-.12
家族への被援助態度に対する肯定的態度	.12*	.01
家族への被援助に対する懸念や抵抗感の低さ	.29***	.22*
カウンセラーへの被援助態度に対する肯定的態度	.05	.16
カウンセラーへの被援助に対する懸念や抵抗感の低さ	.25***	.14
<i>R</i> <sup>2</sup>	.58***	.39***

\**p* < .05, \*\**p* < .01, \*\*\**p* < .001

あった。一般的な被援助志向性に対し、「家族サポート」( $\beta = .31, p < .001$ )・「友人サポート」( $\beta = .17, p < .001$ )・「援助要請過剰型」( $\beta = .11, p < .05$ )・「他者指向的反応」( $\beta = .13, p < .05$ )は正の影響を、「援助要請回避型」( $\beta = -.25, p < .001$ )・「想像性」( $\beta = -.10, p < .05$ )は負の影響を及ぼしていた (Table 4)。

カウンセラーへの被援助志向性の回帰式は有意 ( $p < .001$ ) であり、 $R^2 = .28$ であった。カウンセラーへの被援助志向性に対して、「他者指向的反応」( $\beta = .16, p < .05$ )・「家族への被援助に対する懸念や抵抗感の低さ」( $\beta = .22, p < .01$ )・「友人への被援助態度に対する肯定的態度」( $\beta = .23, p < .001$ )は正の影響を及ぼしていた (Table 5)。

家族への被援助志向性の回帰式は有意

( $p < .001$ ) であり、 $R^2 = .59$ であった。家族への被援助志向性に対し、「家族サポート」( $\beta = .48, p < .001$ )・「友人への被援助態度に対する肯定的態度」( $\beta = .10, p < .05$ )・「友人への被援助に対する懸念や抵抗感の低さ」( $\beta = .33, p < .001$ )・「カウンセラーへの被援助態度に対する肯定的態度」( $\beta = .12, p < .01$ )・「カウンセラーへの被援助に対する懸念や抵抗感の低さ」( $\beta = .13, p < .01$ )は正の影響を、「友人サポート」( $\beta = -.18, p < .001$ )・「援助要請回避型」( $\beta = -.14, p < .01$ )は負の影響を及ぼしていた (Table 6)。

友人への被援助志向性の回帰式は有意 ( $p < .001$ ) であり、 $R^2 = .58$ であった。友人への被援助志向性に対して、「友人サポート」( $\beta = .33, p < .001$ )・「援助要請過剰型」( $\beta = .16, p < .001$ )・「家族への

被援助態度に対する肯定的態度」( $\beta = .12, p < .05$ )・「家族への被援助に対する懸念や抵抗感の低さ」( $\beta = .29, p < .001$ )・「カウンセラーへの被援助態度に対する懸念や抵抗感の低さ」( $\beta = .25, p < .001$ )は正の影響を、「家族サポート」( $\beta = -.15, p < .01$ )・「想像性」( $\beta = -.12, p < .01$ )・「自己指向的反応」( $\beta = -.10, p < .05$ )は負の影響を及ぼしていた (Table 7)。

## (2) カウンセリング経験有り群の重回帰分析結果

カウンセリング経験有り群において一般的な被援助志向性やカウンセラーへの被援助志向性、家族への被援助志向性、友人への被援助志向性に及ぼす影響を検討した。

その結果、一般的な被援助志向性の回帰式は有意 ( $p < .001$ ) であり、 $R^2 = .48$ で

あった。一般的な被援助志向性に対し、「家族サポート」( $\beta = .41, p < .001$ )・「他者指向的反応」( $\beta = .24, p < .05$ )は正の影響を、「援助要請回避型」( $\beta = -.36, p < .001$ )は負の影響を及ぼしていた (Table 4)。

カウンセラーへの被援助志向性の回帰式は有意 ( $p < .001$ ) であり、 $R^2 = .30$ であった。カウンセラーへの被援助志向性に対して、「他者指向的反応」( $\beta = .27, p < .05$ )は正の影響を、「援助要請回避型」( $\beta = -.36, p < .01$ )は負の影響があった (Table 5)。

家族への被援助志向性の回帰式は有意 ( $p < .001$ ) であり、 $R^2 = .55$ であった。「家族サポート」( $\beta = .61, p < .001$ )は正の影響があった (Table 6)。

友人への被援助志向性の回帰式は有意 ( $p < .001$ ) であり、 $R^2 = .39$ であった。

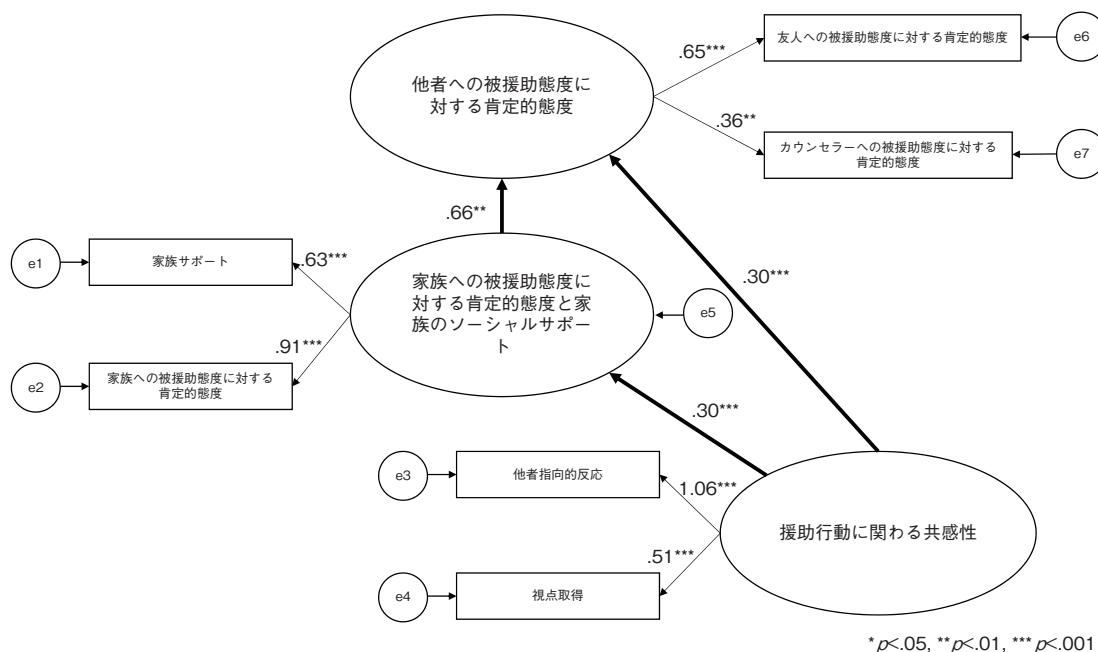


図1 被援助態度に対する肯定的態度のモデリング



「友人サポート」( $\beta = .27, p < .01$ )・「家族への被援助に対する懸念や抵抗感の低さ」( $\beta = .22, p < .05$ )は正の影響があった (Table 7)。

#### 4. 共分散構造分析結果

カウンセリング経験なし群において、被援助志向性 (被援助態度に対する肯定的態度・被援助に対する懸念や抵抗感の低さ) のモデリングを行った。その結果、被援助態度に対する肯定的態度の適合度指標は  $GFI = .99, NFI = .98, CFI = .99, RMSEA = .03$  と適切な値を示し、このモデルを採択した (図1)。

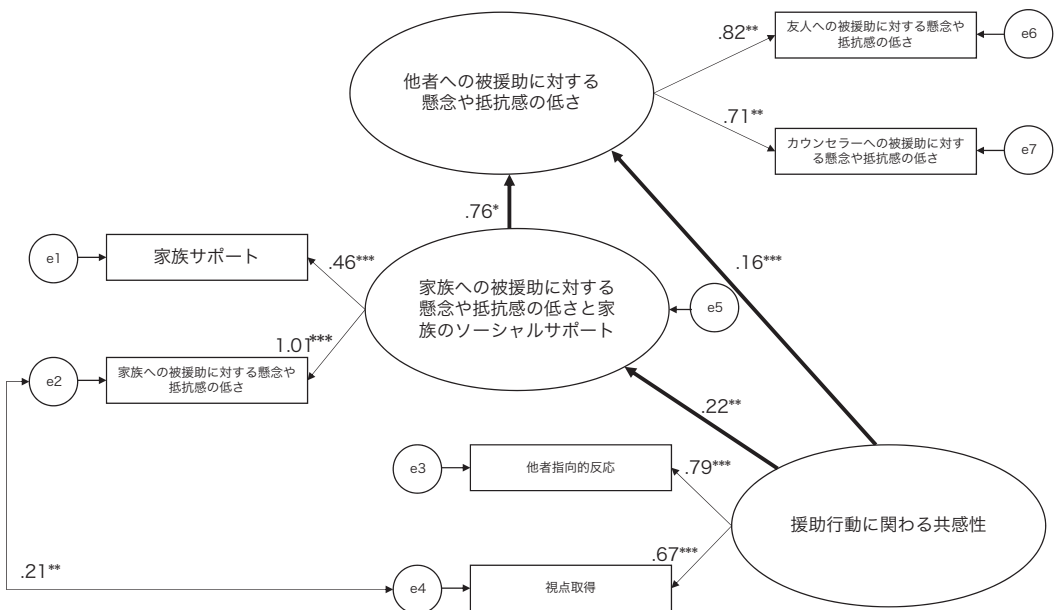
また、被援助に対する懸念や抵抗感の低さの適合度指標  $GFI = .99, NFI = .98, CFI = .98, RMSEA = .07$  と適切な値を示し、このモデルを採択した (図2)。

## V 考察

### 1. 考察

カウンセリング経験と家族・友人のカウンセリング経験の関連について検討した。その結果、カウンセリング経験があると家族・友人のカウンセリング経験もあることが多いことが示された。これは水野・石隈 (1999) のレビュー研究で示されたように、事前のメンタルヘルスサービスの接触があるほど、援助を求めるからであると考えられる。家族や友人にカウンセリング経験があると事前のメンタルヘルスサービスの接触となり、カウンセリングに赴くことへの懸念や抵抗感が薄らぐこと、カウンセリングに対して肯定的にとらえることにつながるのではないかと推察できる。

カウンセリング経験の有無ごとに重回帰分析を行った。共感性はその下位尺度である「他者指向的反応」が一般的な被援助志



\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

図2 被援助に対する懸念や抵抗感の低さのモデリング

向性とカウンセラーへの被援助志向性に正の影響することが明らかとなった。「他者指向的反応」には、「悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる。」など援助行動に関わる共感性であることから他者に対して援助したいと考える人ほど周囲に援助を求めることに肯定的になり、懸念や抵抗感も低くなると考えられる。したがって、共感性の援助行動に関わるものが高めることが被援助志向性を高めるために重要かもしれない。そして、ソーシャルサポートは一般的な被援助志向性に影響するが、カウンセラーへの被援助志向性の影響は確認できなかった。加えて、家族サポートが家族への被援助志向性、友人サポートが友人への被援助志向性に正の影響があることが明らかとなった。

また、カウンセリング経験なし群において家族・友人への被援助志向性がカウンセラーへの被援助志向性に影響があった。つまり、家族サポートは家族への被援助志向性からカウンセラーへの被援助志向性に影響する。友人サポートは友人への被援助志向性からカウンセラーへの被援助志向性に影響する。したがって、家族・友人のサポートはカウンセラーへの被援助志向性には直接影響しないが、家族・友人への被援助志向性から間接的に影響するのかもしれない。さらに、カウンセリング経験なし群において、友人サポートが家族への被援助志向性、家族サポートが友人への被援助志向性に負の影響があった。これは、ソーシャルサポートと家族・友人への被援助志向性は相補的な関係にある可能性があることを示しているかもしれない。つまり、家族サポートが不十分であったときは友人サ

ポートを充実させ、友人への被援助志向性が高くなり、友人サポートが不十分であったときは家族サポートを充実させ、家族への被援助志向性が高くなると考えられる。

共分散構造分析から家族への被援助志向性と家族サポートが友人・カウンセラーへの被援助志向性へ、援助行動に関わる共感性が被援助志向性を促進するモデルを提唱し、結果が得られた。これから、家族への被援助志向性と家族サポートが、援助を求めることの基盤となり、第三者である友人やカウンセラーへの被援助志向性に影響すると言える。また、共感性は援助行動に関わる、「他者指向的反応」と「視点取得」が影響し、他者に共感して援助行動をとる人ほど、他者を頼り援助を求めるようになると考えられる。

高木（1997）は援助行動と被援助行動の肯定的・否定的な評価がその後の援助行動や被援助行動に影響を及ぼすと述べている。つまり、援助行動と被援助行動は相補的な関係があるのではないだろうか。既知のように、援助行動はソーシャルスキルや共感性などの健康的な部分が必要であり、同様にこれらが被援助行動や被援助志向性を持つためのポイントになるのではないだろうか。加えて、カウンセリングにつながらない者はソーシャルサポートや共感性が低く、被援助志向性の基礎である家族の被援助志向性も欠如している可能性がある。そのため、補完させる働きかけが必要となる。例えばD’Zurilla & Nezu（1995）は「援助要請が不得意な生徒に対して社会的問題解決訓練がよい」と述べており、副次的に学校適応にも効果があると言われる（佐藤，2005）。そして、ソーシャルサポート

を高めるために言語的援助要請スキルを高めることが重要である（阿部ら，2006）。言語的援助要請スキルを高めるためのソーシャルスキルトレーニングがあり，それらを行うことも有用である。学生にこのような働きかけをすることが被援助志向性を高めることになり，副次的に学業達成やウェルビーイングに良く，予防につながるため重要ではないだろうか。

## 2. 仮説の検証

本研究では以下の仮説を立てた。

仮説1 共感性が高いほど，一般的な被援助志向性とカウンセラーへの被援助志向性が高くなる。

仮説2 ソーシャルサポートが高いほど，一般的な被援助志向性とカウンセラーへの被援助志向性が高くなる。

仮説1は，重回帰分析から共感性の下位尺度である「他者指向的反応」が一般的な被援助志向性とカウンセラーへの被援助志向性に正の影響を与えた。さらに共分散構造分析から，「他者指向的反応」と「視点取得」がカウンセラーへの被援助志向性に影響することが明らかになった。これから仮説の一部が支持された。

仮説2では，重回帰分析からソーシャルサポートが一般的な被援助志向性に正の影響を与えた。共分散構造分析からソーシャルサポートの一つである家族サポートがカウンセラーへの被援助志向性に影響することが明らかになった。これから仮説の一部が支持された。

## VI 総合考察

共感性とソーシャルサポートが一般的な

被援助志向性を高める。さらに家族サポートは家族への被援助志向性に，友人サポートは友人への被援助志向性を高める。被援助志向性の中では，家族・友人への被援助志向性がカウンセラーへの被援助志向性を高めることが分かった。

上記の結果を踏まえて，共感性が家族・友人・カウンセラーへの被援助志向性を促進し，家族サポートと家族への被援助志向性がカウンセラーへの被援助志向性を高めるモデルを提案した。先行研究において，専門家に援助要請した者はしなかったものより援助資源が少ないということ（水野・石隈，1999）やソーシャルサポートがカウンセラーへの被援助志向性を高めること（Starzynski et al., 2007；水野，2017）が指摘されている。本研究の結果からは，家族サポートと家族への被援助志向性がカウンセラーへの被援助志向性を高めることが示された。また，他者に対する同情や配慮を測定する「他者指向的反応」や，自発的に他者の心理観点をとろうとする傾向を測定する「視点取得」などの共感性の下位尺度も正の影響を与えていた。これらは援助行動に関わるものであり，援助行動と被援助行動に何らかの関係があることを示唆していると考えられる。

## VII 研究の限界と今後の展望

本研究では，援助行動に関わる共感性と家族サポートと家族への被援助志向性が基盤となり，その他の被援助志向性に影響することが明らかになった。これによって，サポート的な環境が重要であることも明らかになった。家族のサポートや家族への被援助志向性が多くの人が抱える基盤的な

環境であるが、必ずしも代替できないものではないため学校や福祉施設などにおいてサポート的な環境を提供することもよいのではないかと考えられる。

しかし、本研究の対象者は女子大生であり、被援助志向性、共感性、ソーシャルサポートの関係を明らかにするために男女ともに幅広い年齢を標本として検証する必要がある。また、カウンセリング経験有り群はカウンセリング経験なし群と異なり標本数が小さかった。そのため、カウンセリング経験について同程度の標本を検証する必要がある。

## VIII 文献

阿部聡美・水野治久・石隈利紀 (2006).

中学生の言語的援助要請スキルと援助不安、被援助志向性との関連. 大阪教育大学紀要, 54(2), 141-150.

D'Zurilla, T. J., & Nezu, A. M. (1999). Problem-solving therapy: A social competence approach to clinical intervention. *Springer Publishing Company*.

中田洋二郎, 椎谷淳二, 杉山圭子 (訳) (1995). 問題解決療法: 臨床的介入への社会的コンピテンス・アプローチ, 金剛出版.

Hoffman, M. L. (2001). Empathy and moral development: Implications for caring and justice. *Cambridge University Press*.

菊池章夫・二宮克美 (訳) (2001). 共感と道徳性の発達心理学, 川島書房.

本田真大・新井邦二郎・石隈利紀 (2011).

中学生の友人, 教師, 家族に対する被援助志向性尺度の作成. カウンセリング研究, 44(3), 66-75.

川上賢人 (2007). こころの健康についての疫学調査に関する研究, 平成16~18年度厚生労働科学研究費補助金 (こころの健康科学研究事業) こころの健康についての疫学調査に関する研究総合研究報告書.

國分康孝 (2000). カウンセリングの技法, 誠信書房.

Larochette, A.C., Chambers, C.T., & Craig, K.D.(2006). Genuine, suppressed and faked facial expressions of pain in children. *Pain*, 126, 64-71.

水野治久・石隈利紀 (1999). 被援助志向性, 被援助行動に関する研究の動向. 教育心理学研究, 47, 530-539.

水野治久 (2017). 援助要請と被援助志向性の心理学. 金子書房.

文部科学省 (2018). スクールカウンセラー等配置個所数, 予算額の推移. [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2014/11/14/1341643\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2014/11/14/1341643_1.pdf) (2018年5月7日取得).

永井智 (2010). 大学生における援助要請意図-主要な要因間の関連から見た援助要請意図の研究-. 教育心理学, 58, 46-56.

永井智 (2013). 援助要請スタイル尺度の作成-縦断調査による実際の援助要請行動との関連から-. 教育心理学研究, 61, 44-55.

佐藤純 (2005). 中学生における社会的スキルと学校適応の関連-援助要請スキルを加えての検討-. 日本カウンセリング学会第38回大会発表論文集, 253-254.

- Schaller, M., & Cialdini, R.D.(1998). The economics of empathic helping: Support for a mood management motive. *Journal of Experimental Social Psychology*, 24(2), 163-181.
- 嶋信宏 (1992). 大学生におけるソーシャルサポートの日常的ストレスに対する効果. *社会心理学*, 7, 45-53.
- 島田泉・高木修 (1994). 援助要請を抑制する要因の研究 I-状況認知要因と個人特性の効果について-. *社会心理学研究*, 10(1), 35-43.
- Starzynski, L. L., Ullman, S. E., Townsend, S. M., Long, L. M., & Long, S. M. (2007). What factors predict women's disclosure of sexual assault to mental health professionals?. *Journal of Community Psychology*, 35(5), 619-638.
- 鈴木有美・木野和代 (2008). 多次元共感性尺度. *教育心理学研究*, 56, 487-497.
- 高木修 (1997). 援助行動の生起過程におけるモデルの提案. *関西大学社会学紀要*, 29(1), 1-21.